



図4 果叢葉の裏側病斑

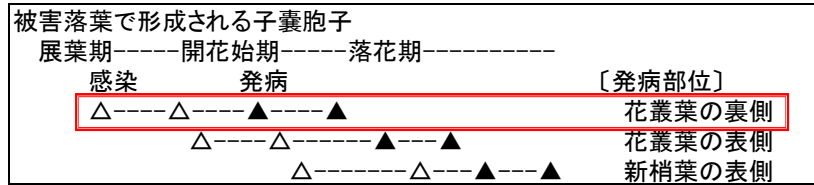


図5 黒星病の感染、発病時期と発病部位 (仲谷 1991)

(摘要)

- ・展葉期～開花前に早期感染すると果(花)叢葉の裏側に病斑がみられる。
- ・この場合、発病は開花期頃からみられるため、早期多発の原因となる。

4 平成30年の発生要因

- (1) 前年は8月の長雨により感染が助長されたため、本年の一次伝染源量が多かったと考えられる。
- (2) 一次感染は、開花5日前の4月25日の降雨が主たる感染時期であり、開花直前散布よりも感染時期が早く、防除が困難だった(図2、図6)。
- (3) 発病は落花期頃(5月13日頃)に起こったため、5月中旬の連続降雨により二次伝染した(図6)。

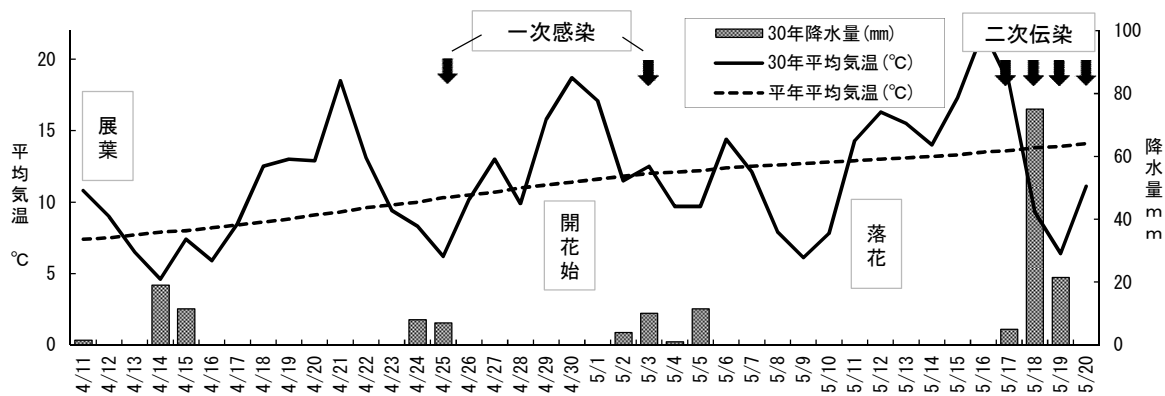


図6 平成30年の展葉期から落花期頃の気象経過および推定感染日(二戸市)

5 基本的な防除の考え方

- (1) 園地内の伝染源密度が年々高まっていると考えられるので、本年に発生がみられた園地では次年は本病の重点防除が必要である。
- (2) 前年の被害落葉からの子のう胞子による一次感染を防止する。この一次感染は、りんごの開花期前後の降雨日に起こるため、開花直前が最重点防除時期である。
- (3) 近年は、展葉期～開花期の多雨により、防除適期を逃していることが発生要因として考えられるので、この早期感染に対応した防除が必要である。

6 防除対策

○ 薬剤防除

- (1) 前年の発生園地では、開花直前のE B I剤として、本病に卓効を示すスコア顆粒水和剤を用いる。
- (2) 前年の多発園地(早期感染により果叢葉や幼果での発病が多い園地)では、開花7～10日前にE B I剤を特別散布する。また、開花直前はE B I混合剤(スコアMZ水和剤)を用いる。
- (3) 開花直前のE B I剤散布前に降雨があった場合、日数を空けないで散布する。
- (4) 散布量不足や散布ムラが発生要因となるので、薬剤散布は十分量散布する。
- (5) E B I剤は耐性菌が発現する恐れがあるので、落花10日後以降は使用しない。

○ 耕種防除

- (1) 被害落葉は、一次伝染源となるので、芽出前に集め土中に埋没させるか焼却するなどして処分する。
- (2) 前年多発した樹(特に、若木)では、りん片越冬による感染を回避するため、側枝先端の頂芽を先刈りする。

7 参考文献

- (1) 仲谷房治(1991) 最近のりんご黒星病の多発要因と防除対策 (植物防疫 45:46-49 第2号)